

テーマ：「戦後70年について思うこと」(県立尼崎北高校 放送部)

(8/25, 29 放送分)

稲村 皆さん、こんにちは。尼崎市長の稲村です。今回も、元気いっぱい、市内の高校生の皆さんによる番組をお楽しみいただきましょう。

それでは、さっそくスタートです。どうぞ。

大野 皆さん、こんにちは。尼崎北高校 放送部です。

今年で戦後70年となりますが、私たちは戦争のことについてあまり知りません。ですから、実際に被害に遭われた皆さんにお話を伺おうと思います。

インタビュアーは、大野加奈子、

富士枝 富士枝沙季、

池田 池田美佐子、

大野 が、お送りします。

本日は、尼崎市原爆被害者の会 会長 山下喜吉さん、事務局長 山家好子さん、そして、東山照子さんにスタジオにお越しいただきました。まず大野がお話を伺います。

それではまず東山さん、戦争中はどのような生活をされていたんですか。

東山 はい。戦時中は、小学校の1年生のときに大東亜戦争が始まったのは、教室で先生が教えてくれたんですけど、それから、ラジオでは「いい話」ばかりだったんで、子供心に「日本は強い、強い」と思ってたんですけど。

3年生くらいになった時だったかな、もう食べる物も配給になり、子供ですからね、美味しい物を食べたかったんですけど、親があんまり食べさせてくれないで、ひもじい思いをしたような覚えがあるんですけど。

学校は転々と変わって、原爆が落ちる頃、戦争が終わる頃にはもう、学校4回も5回も変わってありましたね。その間、疎開も出たり入ったり、親戚預けられたり、公民館のような田舎の方へ預けられたりして、もう我がままで、また時々帰っては来たりしたんですけど。終戦前は、広島市内に実家がありますので、その近くの「矢野」という所に住んでおりましたね。

終戦後、弟が生まれたのかな。その時には食べる物がなくて、何を食べて子供を大きくしたんかよくわからないけど、草を採りに行ったり、近所のお百姓さんがある所の草取りを手伝って、もらって帰ったりして、食べた覚えはあるんですけど。「食べること」ばかり、ひもじい思いをしましたね。

大野 山家さんは、いかがでしたか。

山家 はい。わたくしはですね、戦争が終わる1年ぐらいまでは、まあまあ穏やかで。B-29は広島町通るんですが、東の方、東の方、行きますんでね。あんまり、そう恐ろしい思ったこともないんですが。

そうですね、食べ物が配給制で、服を買うのも切符制で、何でもかんでもね、そういうような不自

由なことは、ありましたですね。

大野 山下さんは、いかがでしたか。

山下 はい。わたくしは当時 16 歳。終戦の折に 16 歳でしたけれど。原爆の折には、海軍の養成所でありまして、仕事の関係で山口県から広島行きまして、その帰り道に広島で先導爆沈されて、足止めを食いまして動けなかったんで、広島で戦後の入市でございまして、そこで残留放射能で被曝したわけでございます。

何時間あったか、はっきりした記憶がないんですけども、1 時間か 2 時間か。その間に人 1 人が 2 人見かけましたかね。全くの焼け野原で、ある程度片付いておりましたけれども「ものすごいもの落ちたんやな」と思って。そういう感じでおりました。

大野 東山さんは、「原爆の日」はどうされておりましたか。

東山 「原爆の日」は、夏休みの第一回目の登校日で、5 人おりました。ちょうど 8 時から朝礼で集まっていると、空襲警報が鳴ったんですけど、また警戒警報になったので、そのまま学校で先生のお話を聞いている時に、B-29 が一機だけ、学校の上に来て来たんです。

真っ青い、青空のきれいな所に、飛行機雲をひいて B-29 が来るのを、朝礼しているみんなで、敬礼していましたからね。青空を眺めている時に、光が、先に光が来ました。距離があるもんで、1、2 の 3 まで行かんうちにガーン。それはそれもう、ドーっと揺るんだんですけど、それが初めての経験っていうのか、もうびっくりして。先生が「帰れ！」って言うから、みんな家には帰ったんですけど、「我が家に落ちた」ばかり思って、大泣きして帰ったんですけど、家は建具が閉まらんくらいで、母は一人で、弟が生まれる前でしたから大きなお腹して、裏の防空壕に隠れておりましたけど、どうしたんやろか、何が落ちてどうなったのか、わからんづくに、国道が近くですから、国道へ出てみると、被曝した人がトラックに積まれて、どんどん帰ってくる時間帯になりましたからね。

私の学校にも被曝した人がどんどん運ばれてきて、すごい火傷で、耳も唇も何も垂れ下がって、手なんかも垂れ下がって、トラックには縦詰め荷物を積むように積んで、何台も来ましたね。

大野 山家さんは、どうされておりましたか。

山家 はい。当時ですね、生徒が集団疎開してまして、私、父親の実家のある宮島まで、電車を乗り継いで市電に乗り、それから己斐の駅に着いて、己斐の駅、ホームで、宮島行きの電車に乗るために、電車で待っていました。その時、爆弾が落ちたんです。

大野 山下さんは、いかがでしたか。

山下 はい。私は直接被曝をしてないんですけども、勤務上、爆弾が落ちた後に広島へ入りましたもので、その惨状はよく分かりましたけれども、落ちた瞬間の惨状は、全く分かっておりません。

広島でおる間、何時間居ったか、当時のことですから記憶もありませんけども、ただ一人だけあったような気がします。「ものすごい爆弾が落ちたな」という感じで、勤務地へ帰りました。

大野 山家さん、ご家族の方は一緒にいらしたんですか。

山家 はい。わたくし、当時家族はですね、父は満州の方におりましたし、一番上の兄は兵隊で大分の方におりまして。下の兄は朝鮮の元山という所におりまして。わたくしと、姉が女学生で学徒動員で出て行ってしまって、家には、母一人が残っていました。私、学校行くために己斐の駅まで行きましたので、母が一人で家にいました。

大野 皆さん、ご無事だったんですか。

山家 そうですね。父が帰って来ましてね。それが半月か一ヶ月か。これは定かではないのですが、姉と父と 3 人で、広島私の住んでいた跡、焼け跡へ行きまして、母を捜しましたし、あちこちの避難所にも参りました。降りた所に池がありまして、その池の中で、母親が、奥歯に金歯を入れていた

んですね。その金歯と、本当に一握りのちっちゃい骨がありまして、「お母さん、ここで死んだんだわ」と、そういうことで分かりまして、本当に兄と二人で、もう二度と母に会えないということで、本当にいつまでもそこで泣いてたことを、思い出します。

富士枝 代わって富士枝がお訊きします。

山家さん、「原爆が落ちた後に黒い雨が降った」と聞きましたが、実際にご覧になりましたか。

山家 はい。「黒い雨」が降ったのは、ちょうどピカッと光って、ドンと。皆、辺りの人が一生懸命逃げている時に「黒い雨」が降りました。そして、もう皆、顔が真っ黒けになりましたね。子供ですから、「何でこんな黒い雨が降るんだろう」という、その時本当に思いましたね。

富士枝 その時、「黒い雨」は浴びましたか。

山家 真っ黒になりましたね、顔が。そして逃げている人も、もう本当にきれいな顔してる人おりませんし、それがどのぐらいの間降ったかというのは、ちょっと覚えてないんですけど。着てる服もみな黒いような、汚い服になりましたね。

富士枝 その後、身体の具合はいかがでしたか。

山家 おかげさまでですね、私、母が強く産んでくれたんか、ありがたいと思ってるんですが、本当に今まで元気で居ります。ありがとうございます。

以 上